Princeton University Library

宮澤賢治全集

6

筑摩書房

宮澤賢治全集第六卷

昭和四十二年九月二十五日初版第一刷發行
昭和四十三年九月二十八日初版第三刷發行

著者　宮澤賢治

發行者　竹之內靜雄

發行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號　一〇一—九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・精興社
製本・美行製本

目次

家長制度……九
秋田街道……一一
沼森……一五
柳澤……一七
盛岡停車場……二五
大禮服の例外的效果……二七
泉ある家……三〇
十六日……三六
猫……四五

ラジュウムの雁……四六
女……四八
うろこ雲……四九
電車……五三
床屋……五五
圖書館幻想……五九
龍と詩人……六一
花梛榮……六六
あけがた……七〇
山地の稜……七四
手紙一……八〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

手紙 二……八三
手紙 三……八五
手紙 四……八七
革トランク……九〇
チュウリップの幻術……九七
インドラの網……一〇九
化物丁場……一一六
ガドルフの百合……一二五
マグノリアの木……一三四
サガレンと八月……一四〇
車……一四八

耕耘部の時計……一五四
氷と後光……一六二
イーハトーボ農學校の春……一六九
イギリス海岸……一七八
臺川……一九四
或る農學生の日誌……二〇九
フランドン農學校の豚……二二八
稅務署長の冒險……二四八
毒蛾……二七九
花壇工作……二九〇
十月の末……二九三

谷……三〇三
二人の役人……三一二
鳥をとるやなぎ……三二一
風の又三郎……三二九
さいかち淵……三七六
疑獄元兇……三八五
後記……三八九

宮澤賢治全集　第六卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

家長制度

火皿は油煙をふりみだし、爐の向ふにはここの主人が、大黒柱を二きれみじかく切って投げたといふふうに、どっしりがたりと膝をそろへて座ってゐる。

その息子らがさっき音なく外の闇から歸って來た。肩はばひろくけらを着て、汗ですっかり寒天みたいに黑びかりする四匹か五匹の巨きな馬を、がらんとくらい厩のなかへ引いて入れ、なにかいろいろまじなひみたいなことをしたのち、土間でこっそり飯をたべ、そのままころころ、藁のなかだか草のなかだか、うまやのちかくに寢てしまったのだ。

もし私が何かちがったことでも云ったら、そのむすこらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなささうだ。それがだまってねむってゐる。たぶんねむってゐるらしい。

火皿が黑い油煙を揚げるその下で、一人の女が何かしきりにこしらへてゐる。酒呑童子に連れて來られて洗濯などをさせられてゐる、そんなかたちではたらいてゐる。どうも私の食事の支度をしてゐるらしい。それならさっきもことわったのだ。

いきなりガタリと音がする。重い陶器の皿などが、すべって床にあたったらしい。
主人がだまって、立ってそっちへあるいて行った。
三秒ばかりしんとする。
主人はもとの席に歸ってどしりと座る。
どうも女はぶたれたらしい。
音もさせずに撲ったのだな。その證據には土間がまるきり死人のやうに寂かだし、主人のめだまは古びた黄金の錢のやうだし、わたしはまったく身も世もない。

秋田街道

どれもみんな肥料や薪炭をやりとりするさびしい家だ。街道のところどころにちらばって黑い小さいさびしい家だ。それももうみな戸を閉めた。

おれはかなしく來た方をふりかへる。盛岡の電燈は微かにゆらいでねむさうにならび只公園のアーク燈だけ高い處でそらぞらしい氣焰の波を上げてゐる。どうせ今頃は無鐵砲な羽蟲が澤山集ってぶっつかったりよろけたりしてゐるのだ。

私はふと空いっぱいの灰色はがねに大きな床屋のだんだら棒、あのオランダ傳來の葱の蕾の形をした店飾りを見る。これも隨分たよりないことだ。

道が小さな橋にかかる。螢がプイと飛んで行く。誰かがうしろで手をあげて大きくためいきをついた。それも間違ひかわからない。とにかくそらが少し明るくなった。夜明けにはまだ途方もないし、きっと雲が薄くなって月の光が透って來るのだ。

向ふの方は小岩井農場だ。

四っ角山にみんなぺたぺた一緒に座る。

月見草が幻よりは少し明るく、その邊一面浮んで咲いてゐる。マッチがパッとすられ莨の青いけむりがほのかにながれる。

右手に山がまっくろにうかび出した。その山に何の鳥だか澤山とまって睡ってゐるらしい。

並木は松になり、みんなは何かを云ひ爭ふ。

そんならお前さんはここらでいきなり頭を撲りつけられて殺されてもいいな。誰かが云ふ。

それはいい。いいと思ふ。睡さうに誰かが答へる。

道が惡いので野原を歩く。野原の中の黑い水潦に何べんもみんな踏み込んだ。けれどもやがて月が頭の上に出て月見草の花がほのかな夢をただよはしフィーマスの土の水たまりにも象牙細工の紫がかった月がうつりどこかで小さな羽蟲がふるふ。

けれども今は崇高な月光のなかに何かよそよそしいものが漂ひはじめた。その成分こそはたしかによあけの白光らしい。

東がまばゆく白くなった。月は少しく興さめて綠の松の梢に高くかかる。

みんなは七つ森の機嫌の惡い曉の脚まで來た。道が俄かに青々と曲る。その曲り角におれはまた空にうかぶ巨きな草穗を見るのだ。カアキイ色の一人の兵隊がいきなり向ふにあらはれて青い茂みの中にこごむ。さうだ。あそこに湧水があるのだ。

雲が光って山々に垂れ冷たい奇麗な朝になった。長い長い雫石の宿に來た。犬が澤山吠え出した。けれどもみんなお互に爭ってゐるのらしい。

葛根田川の河原におりて行く。すぎなに露が一ぱいに置き美しくひらめいてゐる。新鮮な朝のすぎなに。

いつかみんな睡ってゐたのだ。河本さんだけ起きてゐる。冷たい水を涉ってゐる。變に青く堅さうなからだをはだかになって體操をやってゐる。

睡ってゐる人の枕もとに大きな石をどしりどしりと投げつける。安山岩の柱狀節理、安山岩の板狀節理。水に落ちてはつめたい波を立てうつろな音をあげ、目を覺ました、目を覺ました。低い銀の雲の下で愕いてよろよろしてゐる。それから怒ってゐる。今度はにがわらひをしてゐる。銀色の

雲の下。

歸りみち、ひでり雨が降りまたかがやかに霽れる。

そのかがやく雲の原

今日こそ飛んであの雲を踏め。

けれどもいつか私は道に置きすてられた荷馬車の上に洋傘を開いて立ってゐるのだ。

ひどい怒鳴り聲がする。たしかに荷馬車の持ち主だ。怒りたけって走って來る。そのほっぺたが腐って黑いすもものやう、いまにも穴が明きさうだ。癩病にちがひない。さびしいことだ。

虹がたってゐる。虹の脚にも月見草が咲き又ここらにもそのバタの花。一つぶ二つぶひでりあめがきらめき、去年の堅い褐色のすがれに落ちる。

すっかり晴れて暑くなった。雫石川の石垣は烈しい草のいきれの中にぐらりぐらりとゆらいでゐる。その中でうとうとする。

遠くの楊の中の白雲でくゎくこうが啼いた。

「あの鳥はゆうべ一晩なき通しだな。」

「うんうん鳴いてゐた。」誰かが云ってゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com